

私が介護士になることを

決意した瞬間

佐賀県立伊万里高等学校 2年

野中 南菜さん

私はこの一年の間に祖父と祖母という二人のかけがえのない人を失った。しかし、二人の死はまったく違った。私は二人の死を通し、人の生死について深く考えるようになった。

科学が発達し、私たちの生活はたくさん之恩恵を受けている。医療においても、治療の方法がより多くなった。しかし、選択肢が増えたことで、反対に見えなくなったことがあるのではないか。私は今回のことで、そのように感じた。現代の医療には「延命治療」というものがある。祖父のケースである。私の家族は祖父の延命治療に同意し、自力呼吸ができなくなった祖父はのどに人工呼吸器をつけた。命はつないだが、話すことができなくなった状態で三カ月ほど延命し、たくさんさんの管につながれたまま亡くなった。

祖母は緩和ケアを選び「ホスピス」に入った。ホスピスは安らかに家族と過ごすための場所であり、祖母は一時とても元気になった。病院で入院していたころは、食事もとることができず寝たきりだったが、ホスピスでは一緒におやつを食べたり、散歩したりと、祖父の時にはできなかつた穏やかな時間を過ごすことができた。そして祖母は体調を崩してから、一週間ほどで静かに息を引き取った。

誰もが祖母の最期はとても人間らしいものだったと言う。私も今ではそう思う。だから、一年以上たった今でも、あの時「延命治療」に同意したことが果た

して祖父にとって幸せだったのかという疑問が消えない。

祖父の受けた「延命治療」と祖母の選んだ「緩和ケア」は、どちらも医療技術の進歩によってもたらされた人間の最期の過ごし方だ。医療技術の発達によって、最期の瞬間をどう過ごすかということに對し、選択肢が与えられた。人間の生死が人間によって操られるようになってしまったことを、私たちはどのようにとらえたらよいのだろうか。

昔は人は自然の一部だった。誰にも手出しできない領域である生や死を、私たちは受け入れることしかできなかった。しかし、今は違う。人が人の生死を選べるのである。大切な人には少しでも長く生きてほしいし、自分自身もそうだ。それでも、たくさんの管につながれて生かされ、最期を迎えることが本当に幸せなのか、人間らしい最期といえるのか。かといって、延命を断念して苦痛をやわらげ、穏やかな死を迎えるというのも、精神的には苦しいと思える。

二人の対照的な死を目の当たりにしたからこそ、私はすべての人が直面する死について考える。しかし、その結論はいまだに出ていない。ただ言えることは、生きていく限りにおいて私たちには心が存在するということだ。人間らしい生とは、心臓が動いているだけではない。心と体を切り離し、心を置き去りにしたままの生に、私たちは自分らしい幸せを感じることはできないのではないだろうか。喜びや楽しさ、悲しみでさえも、感じる心を伴った生を、求めるべきではないか。

私は将来「介護士」になりたいと考える。職業体験でデイケアサービスに行つた時、介護士さんに言われた言葉が今でも忘れられない。

「最期の瞬間まで楽しく。だからどんな時でも私たちは笑顔で。」

介護士という仕事は、多くの人の死に近い職業であるだろう。話を聞いたときは、なんて辛い仕事なんだろうと思った。でも二人の死を通してその言葉の本当の意味がやっと分かった気がした。それと同時に、介護施設での祖父が楽しそうに職員の人たちと話したり、遊んだりしていたことを思い出した。その瞬間、私は介護士になりたいと思った。おいしいものを食べて幸せそうな顔をしていた祖父。きれいな花を見て笑顔になった祖母。そんな心を動かす幸せを、たくさんの人に、最期の瞬間まで感じてほしい。「自分らしい」生を最期まで送る手助けができる、そんな介護士に、私はなりた

個人部門

優秀賞

就農への決意

鹿児島県立市来農芸高等学校 3年

砂坂 志高さん

私は牛飼いになる。私が牛飼いを志したのは、小学五年生の蒸し暑い夜のあるできごとがきっかけだった。

蒸し暑い真夏の夜、私がそろそろ寝ようかという時刻に、一本の電話がかかってきた。電話は祖父からで「もうすぐ子牛が生まれるから手伝いに来てくれ」という内容だった。

私は好奇心のままに両親と共に車に乗り込み、祖父の牛舎へ向かった。牛舎に着くと一部屋だけ明かりが灯されていた。そこには黒く大きな牛が縄に繋が

れ、苦しそうな息遣いでうろろと部屋を動き廻っていた。しばらくすると、母牛の尻から黒い小さな足が見え始めた。母がその小さな足にロープを結びつけ、みんなで力を合わせてロープを引っ張った。長い時間を経て、当時の私の身長とさほど変わらない大きさの子牛が、母胎から生まれ出た。その光景を目の当たりにした私は、牛という存在に魅かれるようになり、祖父の牛舎に足を運ぶようになった。

私が小学六年の時、父が「今やっている車の整備工場を辞め、牛飼いをする。」と言いだした。私は牛が好きなので、もちろん賛成だ。母や私の兄弟も「自分のやりたい事をやればいい。」と賛成した。しかし、牛を飼うにも牛舎がない。そこでまず牛舎を建てることにした。家族総出で大工の助けもなく、約二年間かけて立派な牛舎を建てることになった。

初めて導入した牛は、祖父が丹精込めて育てた母牛だった。最初は一頭だった牛も子を生み、その子牛が母牛となり、その数は次第が増えていった。私はその牛舎に行つて、牛と遊ぶのが一番の楽しみだった。いつしか、「将来の夢は？」と聞かれると「牛飼いになることだ。」と答えるようになっていた。

だが、月日が流れるにつれ、次第に自分のやりたいことがわからなくなっていた。そして毎日のように行っていた牛舎にも足を運ばなくなり、休日は友だちと遊んでばかりいた。

私が中学二年になったばかりのある日の夜、家に一本の電話が鳴り響いた。祖父の家からだった。電話をかけてきたのは祖母で、祖父が苦しんでいると唐突に言われた。両親はすぐさま祖父の家に向かった。両親が着いた時には、祖父の顔はだんだんと青白く変わっていった。

すぐに救急車を呼び、病院に向かった。私は家で留守番をしていたが、不安で仕方がなかった。その夜遅く、父だけが戻ってきた。祖父の容態を聞くと「肺梗塞」という病気で、一命は取り留めたということだった。その時、緊張の糸が一気に切れた。

祖父が入院している間、祖父の牛の話は父がすることになった。私は何かできることはないかと考え、祖父の牛の世話を手伝うことにした。

久々の牛舎。牛は荒い息遣いで餌はただかと言わんばかりにモーモーと吠えていた。この懐かしい光景に、自分自身が子どもの頃に描いていた夢を思い出した。すると、それまでもやもやしていた気持ちが晴れたような気がした。昔、描いた夢。それは、かわいい牛に囲まれて生きていくことだった。それから再び牛舎に足を運ぶようになった。そして、牛の世話をしながら気づいたことがある。それは、牛についてあまり知識がないことだ。

私は牛に関する知識を学ぶために、農業専門の高校に入学することを決意し、将来立派な牛飼いになることを志した。今、農業高校の三年生になり、人工授精の練習や分娩介助なども教わっている。そして牛が生まれる瞬間や牛が弱って死んでいく光景を目の当たりにし、かけがえのないものを学べた。この経験は今後、私の強い武器になると思っている。

私は高校卒業後、農業大学校に進学することを強く希望している。そこで人工授精などの高度な技術と資格を取得したい。そして将来は、故郷の種子島の黒毛和牛を引っ張っていける人材になりたい。

個人部門

審査委員特別賞

小さなことから大きな夢へ

昭和薬科大学付属高等学校 1年

大平 紗里さん

私の夢は、薬剤師になって国境なき医師団のような活動をする事だ。よく、なぜ医師でなく薬剤師なのかと聞かれるが、正直、どちらでもよかったのかもしれない。小さい頃から体が弱く、喘息を患っていた私は、週に一度の割合で病院に通っていた。健康な人よりも医師や薬剤師とふれあう機会が多く、もともと医療関係の仕事に就きたいと思っていた。そんなとき、祖母に勧められた職業が薬剤師だった。おばあちゃん子の私は、祖母の期待に応えたくて、薬剤師になることを決めた。

そしてもうひとつの国境なき医師団のような活動をするという夢、これは、小学生の時に、海外でボランティアをしている人が講演をしてくれたことがきっかけで志すようになった。現在の日本ではほとんど感じられないが、世界ではいまだにハンセン病患者に対する差別が残っている地域が多く存在する。既に治療法も予防法も見つかり、感染力も弱いことがわかってきている。しかし、発展途上国などでは、医療環境が整っていないせいで、根拠なく患者を隔離するなどの差別がなくならない。そこで患者たちを救ったのが国境なき医師団というわけだ。この講演会で私はとても感動し、同時に世界の現実に愕然とした。そして、いつか国境なき医師団の一員として活動し、医療格差の是正などに取り組みたい。

いと思うようになった。

戦争や差別は人間が生み出すものである。そしてそれをなくすのも人間である。他人との違いを認め、受け入れられる心遣いができる人こそ、医師団に必要な存在であると考える。今はまだ大きなことはできないが、小さな親切、例えば落ちているゴミを拾うなど、人目の有無に関係なく、当たり前のことを当たり前に行っている。彼らの活動もきつとそうだ。発展途上国や戦場など、劣悪な環境の中で活動せざるをえず、時には難しい選択を迫られることもあるという。緊急で来院した赤ちゃんに酸素マスクを取りつけるとき、もしその赤ちゃんに助かる見込みがないと判断すれば、マスクを外してしまうそうだ。現地では医療器具が十分でないため、より多くの命が助かる方を選択するのだ。それも一種の「優しさ」なのだろう。だが、小さな親切の積み重ねが大きな活動へと広がっていき、人に感動を与えられるようなそんな活動となるのだ。難しいことだが、意識次第で誰でもできる。

私も、新聞に国境なき医師団の記事があれば切り抜いて集めたり、今年からは大学の資料集めを始めたりと、身近なことから将来につなげるようにしている。そして、大学を卒業して国家試験に受ければ、病院に就職したい。調剤薬局では学べないチーム医療を学べるからだ。一時期は新薬の開発にも興味があったが、人とふれあうことが好きで、なにより小さい頃から医師や看護師、そして薬剤師に笑顔で安心させてもらい、そのありがたみを知っているからこそ、病院で働きたいと思うようになった。

自分の将来を人に話すのは少し恥ずかしい。小学校の卒業式で、自分の将来の夢を発表する場面があった。私はもち

ろん薬剤師になって国境なき医師団の一員として活躍する、と発表したのだが、それがテレビのニュースで放送されたのだ。本当に短い時間であったが私は素直に嬉しかった。自分の夢が他人に認めてもらえた気がした。

このことがあって、私は自分自身の夢に自信を持てるようになった。そして、今までよりも積極的に勉強に取り組みようになった。いつか、私が調べて渡した薬で誰かが元気になって、笑顔になってくれることを願って、今はまず、大学受験に向けて頑張っていきたい。

第13回 グループ部門

優秀賞

これからは田舎の出番だ

広島県立加計高校芸北分校 2・3年

中田 和志 村竹 慎也

沖 誠 淀淵 史織

上奥 美沙子 鷺野 弘征

一・活動の動機

私たちが通う加計高等学校芸北分校は、山々に囲まれた自然豊かな場所です。山から流れる水はとても澄みきっています。私たちは生まれてから今まで芸北という地域で育ち、芸北での生活こそが常識であると思っていた。しかし、都会から来た友だちと話していると、玄関の鍵をかけずに寝ることや星がきれいに見えることなど、私たちが当たり前だと思っていたことが次々に覆され、地方と都会の違いにとっても驚かされた。

私たちが住んでいる芸北は、北広島町の中にあり、人口約2500人で島根県境にある。冬になると多くの雪が降り、スキー場は観光客で賑わっている。そのため、芸北で育った地元の人たちのほとんどが雪に慣れており、スキーもできる。しかし、都会で育った人は、多くの雪を見るだけで驚いている。私たちはその姿を見て、スキーができることが自慢できるようになった。

昔から住んでいるこの町は、私たちにとってかけがえのない存在である。しかし過疎化が進み、私たちの地域は輝きを失いかけています。そこで違う地域の特色や文化を知り、私たちの文化の良さを再認識していくことで地域を盛り上げるアイディアが浮かぶのではないかと考えた。

また、今日の日本は食糧のほとんどを

輸入品に頼っている。しかし、これからは世界的に食糧難の時代が来ることが予想され、この問題を解決するためには、農業にかかわる人たちが先頭に立って引っ張っていかねければならない。田舎はその中の大事な地域的要素である。

二・田舎の魅力

はじめに田舎と都会を比べ、田舎の魅力を再認識しようと考えた。

田舎と都会には、人と人とのつながりで大きな違いがあることに気づいた。都会に住んでいたことのある生徒の話では、アパートに住んでいる人は周囲の部屋の人に関して知らないことが多く、中には隣に住んでいる人のことさえ知らないことがあったと聞いた。また、引越しをする人もいるため、たとえその場所に馴染んだとしても環境が変わってしまうため、人とのつながりは少ないと考えた。

しかし、田舎ではその場所にずっと住み続けている人たちがいて、そしてこれからもその場所に住み続ける人がほとんどである。さらに、自分と関係のある親戚などが大勢いる。自分と無関係の人なら難しいが、そういう関係があればお互いに助け合ったりすることができると考えた。

また、日本の人口の約2割が高齢者で超高齢者社会となった。(2007年度統計)その高齢者が暮らしやすいのはやはり田舎の環境である。なぜなら、自然が豊かで車の交通量も少なく、安心して暮らせるためだ。加えて、田舎の人はコミュニケーションをとることや困った時には助けあう習慣もあることから、とても暮らしやすい環境であると考えた。

私たちは人口の少ない田舎はその支え合いがあるからこそ信頼感が生まれるのだとわかった。私たちの地域で外出

するときには鍵をかけないという、都会では考えられないことも地域の人たちの信頼関係があるからである。

三・田舎の環境、芸北と都会の違い

さらに私たちは田舎と都会の環境とでは何が違うのかに目を向けた。

まず都会から来た生徒に聞くと、都会は田舎のように自然の中で遊べるような場所が身近にない。そのため家でテレビゲームをして遊んだりすることが多く、そしてそれは子どもの体力低下の原因となっている。しかし田舎ならどうだろう。私たちの住んでいる芸北は、80パーセントを山が占めている。だから私たちは子どもの時、夏には山に入って基地を作った。暑い日には川に入って遊んだ。冬には多くの雪が降り、かまくらを作ったり、ソリやスキーをしたり、クラスのリクリエーションで雪合戦をしたこともあった。そんな生活の中で、自然の美しさや恐ろしさを学び、体力もついた。都会から来た生徒は、芸北のこの自然にとっても驚いていた。

また、田舎に比べて、都会では便利さを追求している。たとえば、「交通機関が充実している」や「買い物しやすい」などがある。しかしそれは、もともと人に備わっている能力を奪っているのではないだろうか。昔の人は、車はもちろん電車もなかったので歩いて移動していた。その結果、足腰は鍛えられ、ちょっとしたことで怪我をすることはまずなかった。

しかし、東北と関東地方に想定外の被害をもたらした東日本大震災で電車が止まった時、駅から人があふれかえっていた。これは大げさな例えだが、今の時代に歩いて遠くまで行くこうなんて誰も考えないだろう。

田舎はインフラの整備において都会よりも数倍不便かもしれない。しかし、その不便があるからこそ田舎には人を逞しく育てるたくさんの能力が秘められていると感じた。

四・田舎の農業

次に食糧難の対策について考えた。私たちはまず、食糧を生産することではなく、たくさんの食糧が捨てられているという所に注目した。日本では毎日多くの食べ物が結婚披露宴や宴会などでテーブルを飾り、そして食べられずに捨てられている。その量は年間約二千万トンと推定され、発展途上国の人たち約一億人の食糧に相当する量である。

一方、発展途上国では八億四千万もの人々が慢性的な栄養不足に陥っている。中でも食糧事情の悪い地域として、インドやアフリカなどが挙げられる。これは世界総人口の約十三パーセントで、十人に一人が栄養不足で苦しんでいるということになる。

また、地球環境悪化により、世界の食糧生産に大きな影響が出るといわれている。その例が地球温暖化である。日本の稲は高温に対応するものが少なく、生産が困難になるといわれている。このように予想されているにもかかわらず日本では大量の食糧が捨てられているのである。これから深刻な食糧危機が必ず訪れるが、日本はその可能性が最も高い国といえる。日本がそうならないために、まず食糧の無駄な消費を減らすことが大切なのではないだろうか。たくさん買すぎない・たくさん作りすぎない・残さず食べる・食材を使い切るといった基本的なことを日本の人々みんなが意識して実行していかないといけない。

そして、もう一つ大切なことは日本の食糧自給率の底上げをすることである。それには農業が重要なポイントになってくる。深刻な食糧危機になると、今輸入している国から輸入できなくなる可能性がある。そうすると今のようには自分たちで食糧を送ることはできず、日本は自分たちで食糧を生産していかないといけない。そこで、もっと日本の農業を活性化すべきだと思った。国内で生産することで、輸入するよりもコストを削減できると考えた。さらに、日本の水はきれいであることから、美味しくて新鮮な野菜や米ができ、国内産のため安全性もあり信頼できる。

以上のことから、今以上に農業に力を入れていくべきだと考えた。

五・田舎の発展

今回の活動で、ずっと住み続けてきた地元と都会を比べる中で新しい発見ができた。いつも何気なく暮らしているが、田舎にはたくさんの良い所があった。例えば、都会に比べて水や空気がきれい。そのためよい農作物がとれること、近所付き合いが多くコミュニケーション能力の向上につながるなどがある。

このことをふまえて、私たちは次のことを提案したい。まず、働く場所を増やし若い人材を集めることだ。今現在、田舎の農業のほとんどを高齢者が担っており、若い世代は少ない。このままでは食糧危機が訪れた時に日本は対応することができない。だから、田舎で作っている農作物をブランド化するなどして、働き口を作っていく必要がある。また、農業を体験するツアーを企画し、若い世代に農業に親しみをもってもらうなどの活動をしていかないといけない。

食糧危機が訪れるだろうと危惧されるこれからの世界。それを乗り越えていくためにはやはり田舎が中心となり、引っ張っていく必要がある。将来私たちの子孫が幸せに暮らせるために。

グループ部門

審査委員特別賞

北高・明日へのマーチ

鹿児島県立大島北高校 3年

榮 健志 富士川浩子 中村里穂

郡奈津希 濱田 和 丸田ゆりか

第一章 テーマ設定の理由

現在日本において、少子高齢化が問題になって久しい。状況は深刻化し、教育界では就学児童や生徒数の減少が大きな問題になっている。その対策として、各自治体では学校の整理統合を進めているため、特に少子高齢化の進む地方においては、学校数が少なくなってきた。

私たちが通学する鹿児島県奄美大島北部の県立大島北高等学校も、以前に比べて生徒数が激減し、十数年前から廃校・統合の噂が絶えない。そんな中、一昨年には、同じ島内にある二つの高校が統合され、今年度一つの高校が廃校を迎える。身近にある高校が廃校になるという現実と向き合ったとき、自分たちの学校も、このまま存続し続けることができるとか、という大きな不安を抱くようになった。自分の母校がなくなってしまうということは、自分たちの足跡がかき消されることであり、とても悲しいことだからこそ、この高校が廃校にならないために、今在籍している自分たちがこの問題について真剣に向き合い、さまざまな角度から考え、大島北高を受験生が志望したくなる、魅力あふれる高校にしていくことが大切だと考えた。この思いのもとにテーマを設定した。

第二章 大島北高を取り巻く状況は今

まず、大島北高（以下北高）を取り巻

く今の状況を以下の2点から考えてみた。

①鹿児島県における高校再編の流れと北高

1996年に鹿児島県から示された高校再編の柱は次の4点である。

ア 適正規模：1学年4学級から8学級を適正規模とする。

イ 小規模校の取扱い：1学年3学級以下の小規模校については、再編整備を実施することにより学校規模の適正化に努める。

ウ 大規模校の取扱い：1学年9学級の大規模校については、学校規模の適正化に努める。

エ 学校・学科の適正な配置：再編整備を実施することにより、学校学科を適正に配置する。

（参考 鹿児島県教育委員会HP）

この基準に則り、普通科単科の県立宮之城高校と農業科の専門科を持つ県立宮之城農業高校との統合により県立薩摩中央高校が誕生したのを皮切りに、現在までに十九校が廃校となり、新たに8校が新設された。

北高が恐れているのは当然イの条件であるが、ここには廃止基準として、全学年の在籍者数が定員の3分の2以下の状態が2年以上続いた場合と挙げている。これに加えて県教育委員会は22年十月に、今後の県立高校のあり方について、隣接する複数校の統合による新設校設置はせず、小規模校の存続条件を厳格化する方針を明らかにした。新たに盛り込まれた廃止基準は、これまで以上に少子化が進む地方、離島の高校にとって厳しく明確なものとなっている。冒頭で触れたが、奄美大島における初めての高

校再編、奄美高校と大島工業高校との合併により、北高の存続が確定したかという点、そうではなく、状況は一層厳しいものになったと考えるのが妥当ではないか

②北高の在籍生徒数の変遷

北高の生徒募集は昭和六十年年度まで普通科2クラス、商業科2クラスであった。その年の各科の募集定員90名に対して普通科が57名、商業科は59名で充足率は64%であった。それから8年後の平成5年度には、普通科1クラス、情報処理科（商業科を廃止し、その年新設）1クラスへと募集定員が変更になり、現在の形になった。その年の充足率は84%となっている。学校存続が危ぶまれるようになった平成十年年度には、地域挙げての存続運動が功を奏して、充足率が100%に達し、一息ついたかに見えたが、その後も定員割れは続き、平成十五年年度は78%、そして今年も78%にとどまっている。

次に地元可愛される学校という視点から、地元中学出身の生徒占有率を見てみるが、ここという地元とは旧笠利町を意味する（理由の詳細は第三章の冒頭に記載）。昭和六十年度は74%、平成五十年度には92%で、充足率100%を達成した平成十年度は意外にも75%であった。そして平成十五年度は74%、平成二十三年度に至っては51%と急激に低下し、これまでの平均を大きく下回る結果が出た。

次章では、伸び悩む生徒在籍数をさまざまな角度から検証して、問題点を焦点化していく。

第三章 生徒数激減の背景に何が

ここでは、生徒数減少の背景に何があ

るか、学校内外の要因から考えてみる。

①外因：減り続ける人口と少子化の波

平成十八年、住民福祉の向上と都市全体の均衡ある発展を図ろうとする理念のもと、笠利町、住用村、名瀬市の三市町村が合併し奄美市が誕生した。

まずは旧笠利町に絞り込み、人口の変遷をたどった。昭和三十〜四十年代、旧笠利町の人口は一万一千人前後で推移していたが、昭和五十年には一万人を割り込みはじめ、人口減が加速した。平成四十年には七千人を割り、現在は6368人。つまりわずか五十年の間に人口は約半数にも減少したのである。それはそのまま、児童数の減少にもつながった。

次に、北高への入学者が多い旧笠利町内にある赤木名中学校と笠利中学校の中学3年、二校合わせた中学33年生の数は212名だった。昭和四十年度は25名、昭和五十年度は236名であった。しかし、昭和五十四年頃から200名を切るようになり、そこから少子化は加速し続け、平成十八年度には62名にまで減少した。奄美市教育委員会の調べによると、平成三十年度の中学3年生は52名にまで減少することが予測されている。単純に現在の地元中学生の占有率51%を適用すると、北高の平成三十一年度の地元中学生の入学者数は、実に28人にとどまることになる。

このように見てくると、北高の生徒数の減少は必然であり、避けることができないことであるように感じられる。

②内因：北高の魅力を発信できているか

次に、私たちは北高自体に何か問題がないか探るため、地元年生、中学2、3年生に協力をしてもらいアンケートを

とった。主な質問の項目は以下の3点である。

(実際のアンケート用紙は別紙参照)

ア あなたが進学したい学校は？

イ アでその学校を選んだ理由は？

ウ 高校で一番取り組みたいことは？

アで北高に進学したいと回答した児童生徒は、小学生で29%、中学生で44%にとどまった。今年度の地元占有率を、想像以上に下回る結果にショックを受けた。アで北高を選択した生徒児童のうち、イの回答で最も多かったのが「通学のしやすさ」であった。ウの回答では、小、中学生ともに「勉強」「部活」だけで9割を占めた。

さらに北高入学後の生徒に、志望した理由、満足度等の調査をすることで問題を点をさらに明確にできるのではないかと考えた。その質問事項と結果は次の通りである。

ア北高に進学した理由は？

イ実際に入学してみて今現在どうか？

アの回答は全学年を通して「楽しそうだったから」「通学しやすかったから」で約7割を占めた一方、「将来の目標を達成できそうだから」は2割程度にとどまった。イについては、「満足・やや満足」が7〜8割を占め、「大いに不満・やや不満」は2年生で28%であったが、1、3年生では2割未満であった。高校生活におおむね満足している生徒の割合が非常に多かったのは、うれしくもあり、同時に少々意外な結果でもあった。

第四章 北高に明日はあるのか

第三章①の少子化の波については、高

校生である私たちにはどうすることもできない。私たちが今、唯一できることは、いかにして②の結果を生かして、小、中学生に北高の魅力を伝えられるかではないだろうか。

高校生活に学習や部活動の充実を求め、小、中学生。確かに、北高には小規模校の割に十二の部、同好会が存在し、それがかえって部員確保を困難にし、思うような成績を残していない部活動も多い。しかし、学習面の集大成ともいえる進路においては、毎年就職も進学も決定率はほぼ100%を達成しており、情報処理科の検定等の資格取得率も低くはない。それなのになぜ、十分に学校の魅力を発信できていないのか。答えは在校生の調査結果にあった。

高校とは、将来の目標実現に近づくための場所。しかも、その目標とは高校生活の中で研磨され自分の可能性に挑戦するものでなければならぬ。しかし、今、北高生の多くが感じている満足感とは、本当になりたい自分があるのに、どことなく妥協している。または、いまだ挑戦すらしていない自分を「これでいいよ」と無理に納得させているだけのものではないのか。そんなお兄ちゃん、お姉ちゃん、の姿に地域の小、中学生が魅力を感じるわけがない。

では、今、私たちに不足していることは何か。それは外の世界に対する知の欲求かも知れない。今、世界の中で起こっていることにもっと関心を持ち、全国の高校生が何を考え、何に挑戦しているのか、それらを知ること自分たちもそれぞれの可能性に挑戦する必要がある。そういう時間が北高生には必要である。

北高のキャッチフレーズは「一人ひとりが主役です」である。生徒一人ひとりが、自分の人生の主役になろうと、自分

を高める姿が学校を活性化し、地域に北
高の魅力を発信することにつながる。北
高に明日はある。